

2026 年度 垂井町大石古窯跡発掘調査現地説明会資料

2026.10.04 名古屋大学人文学研究科考古学研究室

教授 梶原 義実

1. 調査要項

所在地 岐阜県不破郡垂井町大石

調査原因 学術調査

文部科学省科学研究費基金（基盤研究（B）） 2022 年度～2026 年度

「三関周辺における古墳時代から古代の地域動態に関する総合的研究」（23K21984）

調査面積 10 m²（崖面部を含む）

調査期間 2026 年 9 月 19 日～9 月 23 日（予定）

調査機関 名古屋大学大学院人文学研究科考古学研究室

調査協力 垂井町教育委員会、株式会社イビソク

2. 遺跡の概要と調査の目的

大石古窯跡は、昭和 22 年（1947）の村道拡張工事の際に瓦片が出土したことで、その存在が知られることとなった。『垂井町史』では、不破郡史の編者である藤井治左衛門が、国府の瓦を焼いた窯であるとしている。昭和 32 年（1957）には町史跡に指定されている。窯跡周囲の急傾斜面の崩落防止工事の関連で、平成 20 年（2008）に範囲確認調査を実施、その成果を受けて、平成 25 年（2013）には町指定史跡地外の南側の崖面の発掘調査を実施した。その結果、美濃国分寺系の軒瓦を含む瓦集積遺構と、それより古い段階の窯窯（あながま）1 基を確認した。

令和 5 年（2023）、岐阜県の考古学の黎明期を担った考古学者である小川栄一氏の、美濃国分寺に関連する草稿（以下、「小川調書」とする）が、ご令孫の貴司氏により公刊された（小川栄一・貴司 2023）。その中には大石古窯跡に関する報告もあり、それによると、小川氏が調査した大石古窯跡の窯のうちひとつは、塼（せん：古代のレンガのようなもの）を積み上げた構造をとることが、昭和 16 年に小川氏が作図した図面によりあきらかにされていた。

塼積構造をとる古代の瓦窯は、日本ではたいへん珍しく、藤原宮の瓦を焼成した奈良県の日高山瓦窯を嚆矢とし、愛知県の高蔵寺瓦窯、若宮瓦窯の 3 遺跡でしか、これまで確認されておらず、日本古代の造瓦関連技術の伝播を考えるうえで貴重な事例である。しかしながら大石古窯跡周辺は、小川氏調査の後にも度重なる土取りや整地で地形の改変がなされており、小川調書時点の窯本体が現存するかどうか疑われた。

調査担当者の梶原は、文部科学省科学研究費基盤研究（B）「三関周辺における古墳時代から古代の地域動態に関する総合的研究」（2022～2026 年度）において、関ヶ原町不破関跡を中心に、西濃地域の古墳時代から古代の地域動態についての研究を進めてきた。その一環として、大石古窯跡の現状の存否確認と、現存するとしたら、日本でも珍しい塼積瓦窯の具体的な構造を調査するため、本発掘調査を実施することとした。

3. 発掘調査の成果概要

小川調書が示す場所は、町指定史跡地内の尾根筋手前側の崖面と思われ、その部分の崖面崩落土を除去したところ、小川調書とほぼ同様の形で、塼積瓦窯断面が姿を現した。

小川調書では、窯跡幅4尺（1.2m）、高さ4尺7寸（1.4m）のアーチ型を呈し、さらにその窯の東に接して別の塼積窯があるとされている。塼部分および窯床部は青色に塗られており、その外側は赤色に焼けているとされている。

本調査の結果からは、窯底の幅は約 2.2m（断面は斜距離になるので、実際の窯底幅は 2m 強程度）であり、小川調書よりかなり大きい。窯の東側壁は、小川氏が別の窯のものと想定した部分と思われ（小川氏が窯の東側壁とした部分は、後述の東壁の上部が窯内部に向けて大きく崩落した部分であろう）、本調査成果からは、すべて一体の窯の構造物であると結論づけた。また、東側壁の塼積は6段目あたりまでは垂直に積まれており、その上部が窯内側に向かって崩落している状況が確認できた、また西側壁においても、6段目あたりまでの窯外側の面は垂直に積まれており、4～5段目からみられる塼中央部の断裂を境に、窯内側の塼が窯上部の塼とともに内側に凭れ掛かっている状況が確認できた。日高山瓦窯や高蔵寺瓦窯など他の塼積窯でも、窯側壁の塼はいずれも垂直に積まれており、本窯も同様の構造であると判断した。ちなみに日高山瓦窯の報告ではこの塼については日乾レンガと表記されており、通常の塼とは異なり焼成を受けていないものである可能性が高い。窯の高さは塼が最低でも 15 段程度積まれており、復元すると 1.5m 程度になる。

窯の上部構造は、西側壁の上端外側に、桃色系の粘土が貼られた痕跡が確認できることから、こちらも日高山瓦窯と同様、天井部は粘土を貼って構築したものと思われる、

窯底については、小川調書では「厚さ5寸、粘土を敷き」とされるが、調書で青で示された還元焰焼成された部分は、赤の酸化焰焼成部分と土質的には差がなく、地山削り出しで床面を造り出した上に、塼積で壁面を構築する構造をとるものと思われる。

さらに本調査では、窯の西側に3m程度、窯壁に沿って垂直に地山を削り落とした状況が確認できた、尾根筋の端部を大きく削って窯床部の平坦面を造り出すという、大規模な造成工事がおこなわれていたことがあきらかとなった。

窯の開口方向については、残存状態に限界がありあきらかにし得なかったが、元々の地形自体は北側が丘陵状に高くなっていることや、平成 25 年に垂井町が調査した窯が南に開口することから、本窯についても南側に焚口をもつ窯であると想定しておく。

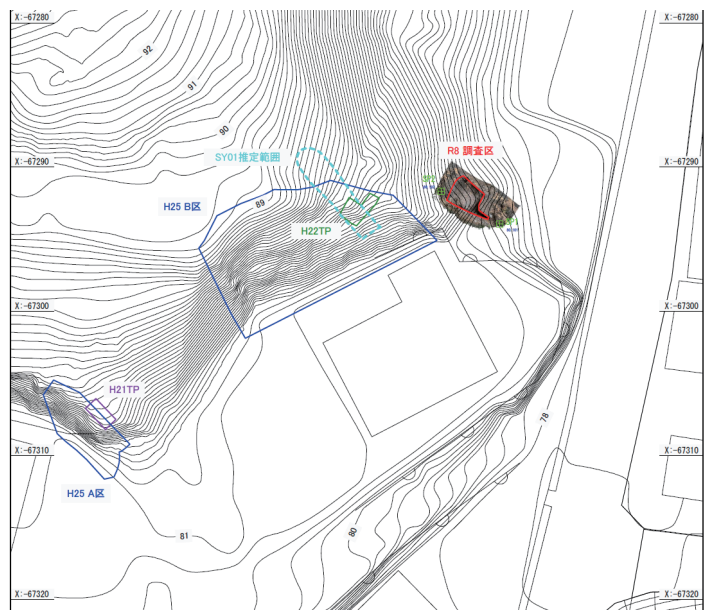
また本調査では、窯の東脇に建てられた史跡碑をその根元まで検出し、内容を確認した。昭和 17 年3月に岐阜県により建てられていることから、当時、小川調書自体は未刊に終わったものの、その成果を岐阜県が認識したうえで、本史跡碑は建てられたと判断できる。

4. 出土遺物

出土遺物としては、本調査では窯体構造物の塼および、平瓦・丸瓦がわずかに出土したのみであるが、垂井町の調査および小川調書では、美濃国分寺系の軒瓦が多く出土している。この瓦は美濃国分寺のみならず、美濃国分尼寺や不破関でも出土しているが、調査者の研究所見として、美濃国分尼寺や不破関の瓦には、美濃国分寺にはみられない范擦れが確認されており、両遺跡の瓦は国分寺に後出する。大石古窯跡出土の瓦はいずれも范擦れがなく、美濃国分寺に供給された段階のものと思われる。また小川調書では、不破関出土の平城宮式瓦のうち、後出とされるものが掲出されており、不破関の瓦も生産していた可能性がある。



大石古窯跡位置図（地理院地図 1:50,000）



調査区位置図（1:600）



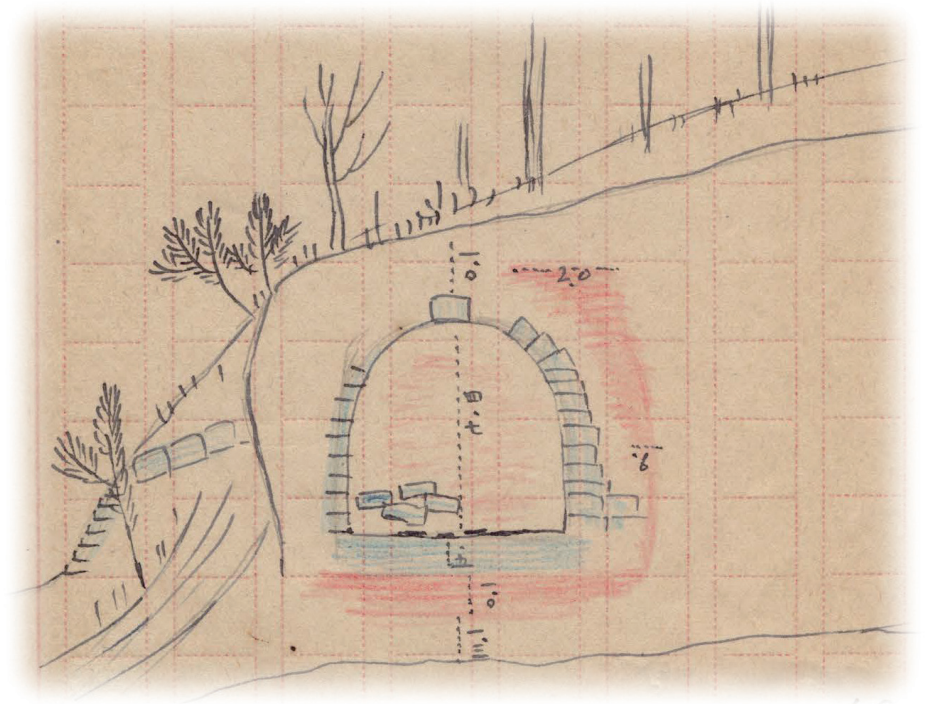
天井部粘土残存部



導の断裂

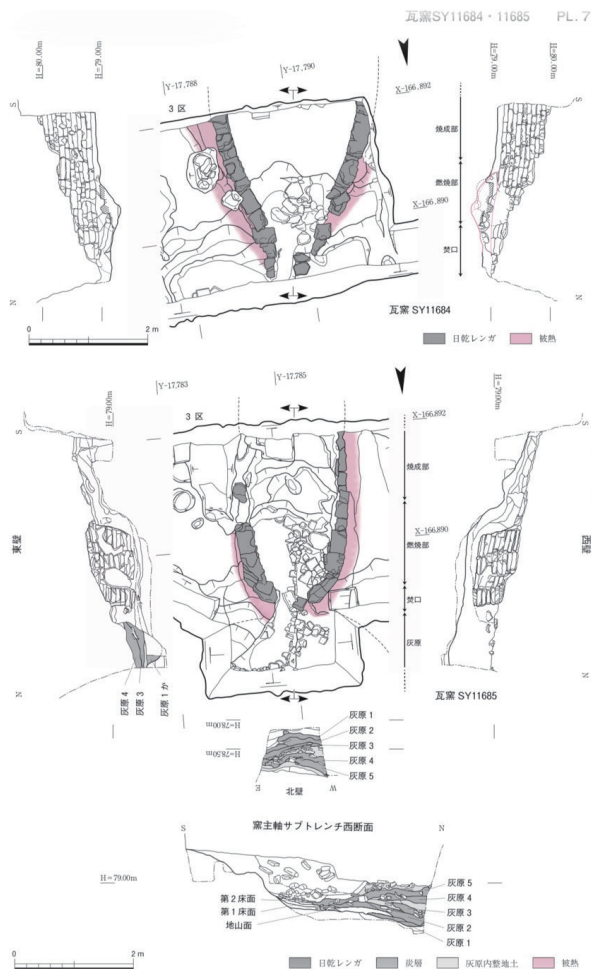
外側は直立

西側壁部分拡大



小川調書による大石古窯跡の断面図および
本調査での遺跡現況

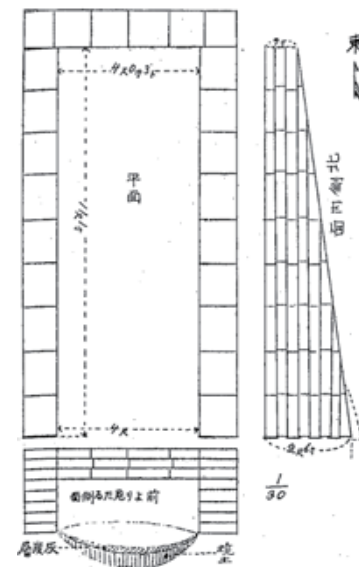




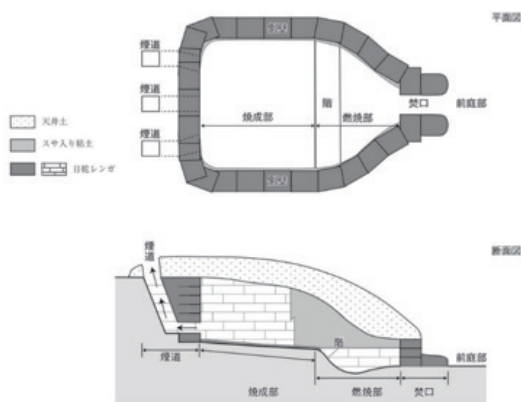
日高山瓦窯の埴積窯（奈良文化財研究所 2026）



（昭和四十七年五月十四日撮影、右側を南と見ると正確）



高蔵寺瓦窯（愛知県 1942・梶山 1983）



上：大石古窯跡の窯体位置推定（小川氏原図に加工）
左：埴積窯の構造模式図（奈良文化財研究所 2026）



本調査にあたっては、地権者の方のご厚情をいただき、また垂井町教育委員会および関連自治区の皆様にはたいへんお世話になりました。心より御礼申し上げます。

主要参考文献：愛知県 1942『愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告 10』、小川栄一・貴司 2023『美濃国分寺とその関連』、梶山勝 1983「春日市市高蔵寺瓦窯の再検討」『名古屋市博物館研究紀要 6』、垂井町教育委員会 2013『大石古窯跡発掘調査報告』、垂井町史編さん委員会 1969『垂井町史 通史編』、奈良文化財研究所 2026『日高山瓦窯発掘調査報告』